ディストピアがもたらす脅威と未来への責任

－ハンス・ヨナスの未来倫理を手掛かりに－

根本和樹（人間学コース）

（指導教員：堂囿俊彦）

キーワード：ディストピア、ヨナス、責任、未来

序論

人類の技術力はとどまることなく進歩を続け、我々の生活をより一層豊かにしている。しかし、良いことばかりではない。大規模な開発は生態系そのものに負の影響を及ぼす可能性を持ち、医療技術の進歩に伴う死や病からの解放は人間にとって大切なものを否定する危険性を持つ。

肥大化した技術は、時として小説内で人類の悲惨な末路（ディストピア）をもたらすものとして描かれることがある。代表的な例として、オルダス・ハクスリー（1894～1963）の『すばらしい新世界』が挙げられる。本論では、現代の哲学者であるハンス・ヨナス（1903～1993）の理論を参考にしつつ、私たちが感じるディストピア世界に対する違和感と守られるべき人間像を明らかにする。

第一章　『すばらしい新世界』内で描かれるディストピア

第一節　オルダス・ハクスリーの生涯

ハクスリーは、1894 年、イングランド南東部サリー州で誕生した。1902 年、名門イートン校に入学し、オックスフォード大学へと進学する。在学中に詩や短編小説を書き始め、卒業後は母校イートン校で教師をしながら詩人としても活躍するようになる。1921 年に初の長編小説『クロームイエロー』を発表する。以降もヒット作の執筆を続け、1932 年、『すばらしい新世界』を刊行。1963 年にハリウッドの自宅で舌癌のため死去した。

第二節　ディストピア世界の成立背景

『すばらしい新世界』におけるディストピア世界は、戦争や食糧不足等による人類の滅亡を防ぐために設立された社会であり、人類の存続と社会の安定が大きな目的となっている。社会の安定と効率化のために、個人の自由は徹底して制限されており、余計な感情や思想を持たないように様々な工夫が講じられている。

第三節　ディストピア世界のシステム

ハクスリーのディストピア世界では、人間は受精卵を基に工場で生産される。生まれる前からランク付けが行われ、ランクの低い人間の知能は、遺伝子操作によって下げられる。あえて階級に差をつけることによって、上位階級の人間は自尊心を保つことができ、社会の安定が保たれている。生後間もなく行われる条件付けによって、その効果は増大する。条件付けは、洗脳のように耳元で何度も同じ文章を繰り返しささやくことにより、特定の思想を植え付けたり、反射行動を利用することで、花や読書など特定の物事に対する好き嫌いも操作する。

ディストピア世界では、一時的に孤独や不安を感じることがあったとしても、副作用のない快楽薬や自由な性交が奨励されており、小さな負の感情は手軽な快楽によって上書きされる。このように、「共同性・同一性・安全性」をモットーとしたディストピア世界では、生まれてから死ぬまで不自由することのない生活を送ることが可能となる。

第二章　ハンス・ヨナスの未来倫理学

第一節　ヨナスの危惧

ハンス・ヨナスは、ドイツ出身の哲学者である。ヨナスは、科学技術の目覚ましい発達によって我々が抱えることになった様々な世界規模の問題や困難に向き合う上で、直接的、瞬間的な範囲を対象とする従来の倫理学では不十分だと主張する。我々の行為は、世の中を便利にする一方で、未来の負債として累積し続けている。負担を背負うことになるのは、未だ存在していない未来世代の人類である。彼らは、我々に対して、権利を主張することも無責任さを訴えることもできない。そこでヨナスは、人類が生存し続けることを義務付ける未来倫理学を構築しようと試みるのである。

第二節　哲学的生命論

ヨナスの未来倫理学は、生命論から始まる。彼が構築した哲学的生命論は、生命の生死を代謝が行われているか否かで判断する。生命は、代謝によって絶えず物質の循環を行うことで形相を維持しており、生存するためには代謝をし続けなければならない。生命には、代謝をする自由はあっても、代謝をしないという自由はない。このような自由の在り方をヨナスは「困窮する自由」と定義し、自らの構想の本質としている。

生命が存在する目的は、存在することそれ自身であり、生命は継続的に生存という自己目的を有している。この目的は、死の脅威が目前に迫ったときに一層力強く主張され、存在か非存在かという選択の中で存在することが選ばれている。存

本要旨は、『2018 年度　静岡大学人文社会科学部社会学科　卒業論文要旨集』第 15 号に掲載されたものを、著者の許可を得て掲載するものである。許可なく転載することを禁止する。

在という目的を備えているということは目的達成を欲しているということであり、存在という目的を達成し続けるということには目的の不達成に対する優越、すなわち価値が生じる。

第三節　人間に備わる自由

生物は、植物から動物、動物から人間という進化の過程の中で、行動の自由度が増加し、新たな自由を手にしている。他の動物には見られない人間特有の自由としてヨナスが主張するのが「有用性からの自由」である。有用性からの自由とは、生存のための本能にとらわれない自由であり、個性の追求や責任能力等が含まれる。ヨナスにとって、この場合の責任は、感情に基づくものではなく、傷ついた生命が発する「生存を求める呼びかけ」に対して耳を傾けることで生じるものである。責任関係が成立する条件として、責任の対象が傷つきやすい生命であり、「私」の行為に委ねられた状態にあることが挙げられる。

第四節　未来世代に対する責任

人間は、他の生き物に対して責任を持つことができる唯一の存在である。人類の滅亡は、責任の担い手が不在となり、責任関係という可能性自体が途絶えることを意味する。ヨナスは、人間は責任の可能性を担う存在として存続が義務付けられているのだと主張し、責任の可能性に対する責任を「存在論的命令」と表現している。存在論的命令は、責任という概念が持つ内在的な要請であり、生命の呼びかけに対する個別的な責任と区別される。存在論的命令が要請する義務は、二つの観点に分類することができる。第一命法が将来の人類の生存に対する義務であり、第二の命法が将来の人類の在り方に対する義務である。在り方に対する義務は、人類がこの先も自由に人間像を描き、責任を担う可能性を残しておくよう要請する。

第三章　守られるべき人間像

第一節　ヨナスの理論から導かれるディストピアの問題点

未来の人類に対する責任を生存という観点に絞れば、ハクスリーの描くディストピア世界は十分に責任を果たしているといえる。しかし、ヨナスの理論に即して考えれば、これらの生活は、全く人間的であるとはいえない。仮にディストピア世界の住人が普段の生活を快適だと感じていたとしても、それは彼らが自由や尊厳を奪われていることに気付いていないということにすぎない。我々が彼らに対して配慮するべきは、彼らの幸福ではなく、義務である。すなわち、彼らが人間として存在し、他者や未来に対して責任を果たすという義務を自ら引き受ける能力が備わっているように配慮しなければならない。

第二節　ヨナスに対するアーレントの政治理論

責任を生命論によって形而上学的に基礎づけようとするヨナスの理論に対しては、批判も多く存在する。代表的な人物として、ヨナスと同時代を生きた政治思想家であるハンナ・アーレント（1906～1975）が挙げられる。

二人の立場の違いを簡単に示すと、ヨナスが責任の基礎づけを、生命に価値を見出すことで行っているのに対し、アーレントは責任の基礎づけを、公的領域における社会契約から行っている。ヨナスにとって重要なのは内在的な人間の本質であり、実際に公的領域における「活動」を確認する必要はないと考えている。ヨナスが公的領域を無視しているということは、彼自身の理論を現実において実践することの困難さを示しているといえる。

第三節　ヨナスの責任理論の実践性

未来世代の人類に対する責任を果たす方法として、ヨナスは、「恐怖に基づく発見術」を提唱する。それは、将来生じうる害悪をイメージし、そしてその害悪に対して主体的に恐怖の感情を引き起こすというものである。将来の害悪を正確に予測することは困難であるが、ヨナスは、好ましい予測より不吉な予測を優先させることで、慎重な判断を要請している。「恐怖に基づく発見術」は、リスクが存在するという可能性を指摘することはできても、実践的な政策を行う上ではあまり有効ではない。

しかし、それでもヨナスの理論は、現代に大きな影響を与えており、ドイツ社会民主党が提出した「北海における環境問題（1980）」には、予防原則というヨナスの理論を踏襲した概念が用いられている。予防原則は、その後の国際会議においてもたびたび用いられている。予防原則が想定するのは、環境や健康を範囲とした目に見える範囲ではあるが、科学的確実性の伴わない予測に対して実践的効力を発揮している。

結論

ハクスリーの描くディストピア世界には明確な問題点があり、周囲と異なる存在として個性を発揮する自由、自発的に責任を負う能力が失われている。人間は、ただ快楽のみを求めてプログラム的に生きるのではなく、自由な思考や行動を通して個性を持ち、責任を担って生きてこそ人間なのである。

ディストピアは、決して単なるフィクションではなく、現実にも起こりうる一つの可能性として未だに存在感を放っている。だからこそ、ヨナスは、今後も人類が存在し続けるために、新たな倫理学を提唱することで未来への責任を義務付けようとしている。責任の義務付けに政策として実践的な効力を持たせることは困難であり、大きな課題として残っているが、それでもヨナスの理論は、課題解決のための一つの手がかりとして、今後も読み継がれていく必要があるだろう。

主要参考文献

- オルダス・ハクスリー,『すばらしい新世界』(黒原敏行訳), 光文社, 2013 年.
- 戸谷洋志, 『ハンス・ヨナスを読む』, 堀之内出版, 2018.
- ハンス・ヨナス,『責任という原理』（加藤尚武訳）, 東信堂, 2000.

本要旨は、『2018 年度　静岡大学人文社会科学部社会学科　卒業論文要旨集』第 15 号に掲載されたものを、著者の許可を得て掲載するものである。許可なく転載することを禁止する。